\_\_\_\_\_

## 

この研究では、「中古天台口伝法門」と「天台三大部」の関係に注目する。

部の学習は、天台教学の基礎であり、日本天台に脈々と活きていると考えたいのである。りこの両者の関係を従来見落としているように思われ、ここを検討してみたい。天台三大しかし実際には、天台三大部の学習がおろそかにされている訳ではないと考えたい。つま従来より口伝法門は、教理の学習学問に目を向けていないかのように思われている。

## 二 天台三大部

及ぼしたことは言を俟たない。部の詳細な注釈書を作成した。そしてこれ等「三大部章疏」は、日本天台に多大な影響をて講述され、天台教学における最も基本となる文献である。そして荆渓溢然は、この三大天台三大部は、または「法華三大部」と言われる文献である。これらは天台智顗によっ

を様々に解釈した、所謂る「偽書」と考えられる文献までもが多数登場するのである。のように要文や問題点を中心とした覚書文献も見られるようになる。あるいはまた三大部所などをはじめとする学問拠点での講義録などが記録・編集されたし、尊舜『三大部尊談』など大部の文献が編集作成された。なおまた比叡山や京都は勿論のこと、地方の談義『法華三大部私記』がある。また鎌倉から室町時代には、『三大部伊賀抄』や『三大部廬日本天台において代表的な天台三大部の研究書としては、平安末期に証真が撰述した

論義の上で高度に発展し、密接に関係していることが注目される。なお忘れてはならない点として、天台三大部の研究と『法華経』との解釈・研究が天台

述』を撰述している。これらは日本天台における三大部の受容と研鑚の成果である。さらにまた江戸時代においても、慧澄頻空が『三大部講義』を、大宝守脱が『三大部講

## 三 口伝法門

紙などによって許可・印信・惣附属・目録伝授などと言われて重宝されたのである。録・筆録を許さず、師匠よりの相伝書状が大きな意味を持つことになる。これが切紙や折は、特に秘義・奥義を師弟面授の上で、口頭により相伝・伝授することであり、そこは記口伝法門は、通途は口によって法門を伝授することである。口決相承とか面授相承など

みることにしたい。相伝されたのかは、従来あまり注目されていないように思われる。この点を確認検討してある。確かに印信・切紙は重宝されたようであるが、それが本来はどのような手順を経て日本天台においては、惠心檀那両流口伝法門として様々に発達したことは周知の如くで

## 四 口伝法門文献と天台三大部

な諸文献に見られる三大部に関係した部分に注目してみる。口伝法門が盛んになるに及んで様々な文献が登場してきたが、ここでは恵心流の中心的

も言える文章が登場する。これもまた中古天台における特徴である。するのである。また日本的な三大部の受容として、三大部の要文をさらに進めて偈頌化とれる訓点口伝などは、とても日本的な学問を示す例であり、それが口伝・口決であったり例えば『摩訶止観』の「止觀明靜前代未聞」や『止観輔行傳弘決』の「複疎三諦」に見らさらにまた日本天台独自な三大部理解として、訓点を重視する学習の様子が見られる。

【キーワード】 口伝法門 天台三大部 中古天台